

iMS の全貌：理念、モデル、活動に関する統合ドキュメント

1. iMS とは：概要とビジョン

iMS（アイムス）は、年齢、専門分野、地域という社会に存在するあらゆる「壁」を超克し、人々が互いに学び合う「共創プラットフォーム」である。単なるスキル習得の場や交流団体ではなく、学術的な理論を基盤として意図的に設計された、持続可能なイノベーション創出エコシステムを目指している。

その中核的なビジョンは、メンバー一人ひとりの内発的動機、すなわち「やりたい」という純粋な探求心や好奇心を起点とし、それが社会を変革する力へと昇華されるプロセスを具現化することにある。

2. 組織プロフィール

- 正式名称: iMS (読み：アイムス)
- 設立: 2017 年 (前身団体の活動を含む)
- 組織規模: 全国に 80 名以上のメンバーが所属 (2025 年時点)
- 活動拠点: 徳島、岡山、和歌山などを中心に、オンラインで全国的に展開

3. なぜ iMS は必要か：現代社会が直面する 3 つの「断絶」

iMS の設立背景には、現代社会、特に日本の組織やコミュニティが抱える深刻な課題認識がある。iMS は、イノベーションを阻害する以下の 3 つの「断絶」を解決するために設計されている。

3.1. 知識の分断 (専門知のサイロ化)

専門分野の深化は、一方で分野間の壁を高くし、知見の孤立化、いわゆる「サイロ化」を招いている。複雑な社会課題の解決には分野横断的な知の融合が不可欠であるが、多くの組織ではそのための「共通言語」や交流機会が欠如している。

3.2. 学びと実践の断絶

大学や教育機関で得られる「形式知」と、実社会で求められる「実践知（暗黙知）」との間には大きな乖離が存在する。多くの学生や社会人は、自身の学びをどのように社会課題の解決に結びつけばよいかわからず、ポテンシャルを活かしきれていない。

3.3. 所属の断絶 (コミュニティの喪失)

終身雇用が崩壊し、雇用の流動化が進む現代において、個人はかつて企業が提供していたような安定した所属コミュニティを失いつつある。これにより、キャリアに関する長期的な視点での相談や、心理的安全性が確保された挑戦の場が減少している。

4. iMS モデル：学術理論に基づく組織設計

iMS は、前述の 3 つの断絶を乗り越えるため、組織論と心理学の 2 つの学術理論を活動の核として導入している。

4.1. 学術的コア理論

- ① 組織論：境界連結 (Boundary Spanning)

異なるコミュニティや組織の間に立ち、情報や知識、資源を媒介・伝達する「境界連結」の概念を組織全体で実践する。iMS は、年齢（学生と社会人）、分野（文系と理系、技術と企画）、地域（複数拠点）といった多次元の境界を意図的に繋ぎ、新たな知の融合を誘発する触媒としての役割を果たす。

- ② 心理学：自己決定理論 (Self-Determination Theory)

人間のモチベーションは、「自律性（自己決定したい）」「有能感（能力を発揮したい）」「関係性（他者と繋がりたい）」という 3 つの欲求によって支えられるとする理論。iMS は金銭的報酬に依存せず、この内発的動機を最大化する組織運営を行う。つまり、メンバーが自らの意志でプロジェクトを立ち上げ（自律性）、得意なことで貢献し（有能感）、仲間と協働する（関係性）ことで、持続可能でエンゲージメントの高い活動を実現する。

4.2. 理論を実践する 3 つのシステム

学術理論を具体的な活動に落とし込むため、iMS は以下の 3 つのシステムを有機的に連動させている。

- ① 相互学習システム (Situational Expertise)

特定の分野では初心者であっても、別の分野では専門家である、という状況 (Situational Expertise) を積極的に活用する。メンバー全員が「先生」にも「生徒」にもなり得るという前提に立ち、相互に知識を教え合う文化を醸成する。

- ② 対面交流システム (Social Capital)

オンラインでの活動を補完し、言語化しにくい「暗黙知」の共有や、信頼関係（社会関係資本）の構築を目的とした対面での勉強会やイベントを重視する。これにより、深いレベルでの知識移転と心理的安全性の確保を図る。

- ③ 共通言語システム (SECI モデル)

知識創造理論である「SECI モデル」を応用し、勉強会を通じて異なる専門分野のメンバーが互いの思考プロセスや専門用語を共有する場を設ける。これにより、分野横断プロジ

ェクトを円滑に進めるための「共通言語」を創造し、組織全体の知識レベルをスパイラル状に高めていく。

5. 活動内容と主要実績

iMS は、その理論的基盤を土台に、多岐にわたる事業を実践している。

- **主要な連携実績:**
 - Microsoft、総務省との実証事業への参画
 - デジタル田園都市国家構想に基づく行政事業への参画（徳島県三好市など）
 - 岡山大学工学部との「次世代研究者育成」事業
- **現在の主要事業:**
 - **市民向け情報化教育:** 行政と連携し、地域の情報リテラシー向上に貢献。
 - **DX 教材開発:** 教育機関や企業向けに、実践的なデジタルトランスフォーメーション関連教材を開発。
 - **次世代研究者育成:** 分野横断型の研究活動をサポートし、学会発表や論文執筆のスキル向上を支援。

6. iMS の新規性と社会的インパクト

6.1. システム的・構造的な新規性

iMS の価値は、個々の活動内容だけでなく、その組織モデル自体にある。

1. **多次元の境界を超えるコミュニティ設計:** 年齢・分野・地域という複数の境界を同時に、かつ意図的に超えるコミュニティは極めて稀であり、従来の同質的なコミュニティが陥る「イノベーションの罠」を回避するモデルとなりうる。
2. **「内発的動機」を起点とする運営:** 多くの組織とは逆に、「個人の『やりたい』」を組織が支援するボトムアップ型モデルは、メンバーの主体性を最大化し、プロジェクトの成功率と持続可能性を高める。
3. **実践と研究の循環モデル:** iMS は社会実装を行うだけでなく、その活動プロセス自体を研究対象とする「アクションリサーチ」を実践している。これは、理論と実践を統合する新しいアプローチである。

6.2. 社会的インパクト

iMS モデルは、個人と社会の両方に対してポジティブなインパクトをもたらす。

- **個人に対して:** 自律的にキャリアを形成し、変化の激しい社会を生き抜くための実践的なスキルと人的ネットワークを提供する。
- **社会に対して:** 産学官のセクターを超えた新しいオープンイノベーションの形を提示し、地域課題の解決や新たな価値創造に貢献する。

7. 連携の提案と将来展望

iMS は、その理念とモデルに共感する外部パートナーとの連携を積極的に模索している。

- **企業の皆様へ:** 境界連結のノウハウを活かしたオープンイノベーションの共同推進、あるいは企業内人材の育成研修プログラムの共同開発。
- **大学・研究機関の皆様へ:** 次世代研究者育成モデルの共同開発や、iMS 自体をフィールドとした社会科学・教育学分野での共同研究。

将来的には、iMS モデルを他の地域や分野にも展開し、個人の成長が社会変革を促す持続可能なエコシステムを全国に広げていくことを目指す。